

## Tiger in my Love

「お前の虎が暴れぬか、そればかりが心配だ。」

父はそれを口癖のように言っていた。

故に、その言葉はいつしか自分の心にポツリとシミを残していた。

それは、父が死んでからもどこかとれないシミとしてずっと変わらなかった。

「うおおらああうおおらあああつ」

戦場に真つ赤な疾風が走る。

幸村は二槍をもって、此度の戦の先駆けを勤めていた。

幸村の槍が振るわれるたびにその地面は武田の赤備えと揃いに変わっている。

「真田源二郎幸村。我、ここにあり。」

怒号の如く、幸村の声が戦場に響いた。

「佐助よ。幸村は奮うておるか。」

武田軍本陣にて、信玄の声が投げられた。

信玄の背後にかけられた武田菱の幕の後ろから佐助の声がした。

「はい、先駆けでいつもどおり奮ってます。」

「うむ。今回も大事ないようじゃの。」

「はい、調子いいみたいです。ここ最近の戦では意識もしっかりと残ってるみたいですし。」

「そうか、ならばよい。」

幸村は内に虎を飼っていた。

かつて、幸村は自分では御する事が出来ないほどその虎は暴れた。

虎は幸村の闘志の現れ、戦場で幸村は虎に呑まれ、記憶や理性を飛ばす事があり、其の度、信玄が自ら幸村の虎を諫める場面が多々あった。

だが、それは幸村の成長と共に滅多に見ることは無くなった。

幸村は虎を押さえ込む事を憶えた。

虎を押さえ、紅蓮の鬼となった幸村を遠くから眺める者がいた。

「Ha!えらく威勢のいいのがいるじゃねえか。」

本陣から、政宗は先駆けの赤が見えていた。

先駆けの赤い武将は次から次へと自分の兵を薙いでいく。

「出るぞ。」

「政宗様つ、お待ちください。」

「これが待てるかってんだ。」

小十郎の制止も聞かず、政宗は馬を駆って先駆けの赤に向って走った。

遠巻きから見ただけでは分からない。武田軍の先駆けの実力。

自分と拮抗するほどの力を持っている故に測りかねるそれを、政宗は自分で試してみたいと思った。

「よお。今度は俺とやろうぜ。」

「名乗られよ。某、全力でお相手いたす。」

政宗は馬上から降りると、刀を抜いた。

「奥州筆頭。伊達政宗。推して参る。」

「伊達つ、政宗…。何故貴殿がこのような最前線に。」

「オモシロそうなヤツがいる。だから手合わせしてみたくなった。それだけじゃダメか？」

「む、畏まった。それでは真田源二郎幸村がお相手いたす。」

幸村の記憶があるのはここまでだった。